

総進図書

岡山栄一 氏

「平成 28 年度 千葉県高校入試結果と今後の入試動向」

# 千葉県高校入試 28 年度の概要と入試制度の方向性

## (株) 総進図書 岡山 栄一

### 選抜枠の拡大、志願倍率に大きな変化！

現行の入試制度になって6年目の入試であった。前期選抜は2月9日、10日に実施され、予定人員22,752人に対し、39,715人が志願し、志願倍率は1.75倍となった。一方、後期選抜は2月29日に実施され、予定人員11,633人に対し、16,563人が志願し、1.42倍であった。公立高校の全体の募集定員は、中学3年生の在籍数が前年度に比べ80人程度の微増であった為、40人増の34,040人であった。今年度の特徴は、前期・後期選抜の志願倍率が前年度と比べ大きく変化したことが挙げられる。これは前期選抜における選抜枠（全体募集定員に対し前期選抜において募集する割合）に変更があり、専門学科及び総合学科が前期選抜において100%まで募集できるようになった為である。多くの高校の専門学科が100%を設定し、後期選抜では「募集なし」という状況になった。次に、[前期選抜]・[後期選抜]の概略を見ていこう。

全日制の前期選抜の志願倍率は、1.75倍で、前年度と比較して0.07ポイント下降した。志願者数は前年度より215人の増でそれほど大きな変化はなく、やはり専門学科の選抜枠の拡大による定員増（前年より1,024人増）が影響した。但し、普通科においては選抜枠の変更はなかった為、普通科のみではほぼ前年度なみで、逆に高倍率を記録した学校・学科数は増えており、厳しい状況となった。二極化傾向はさらに強まり、2.50倍を超えた高倍率の学校は15校17学科を数え、今年度も上位校及び人気校の前期選抜入試は超激戦りになったと言える。その一方、1.00倍に満たない低倍率の学校は、専門学科を中心に前年度より増加し、14校23学科となった。また、専門学科への志願者数は選抜枠拡大により100人程度増加し、6,785人であった。学科別では、「外国語に関する学科」、「看護に関する学科」及び「情報に関する学科」が比較的高い倍率を示した。「理数に関する学科」は、船橋、佐倉及び市立千葉が高倍率を記録する一方、佐原、匝瑳、成東及び長生は1.00倍近い低倍率となった。「水産に関する学科」は0.60倍と軒並み定員割れの状況であった。普通科志向は依然強く、普通科のみの志願倍率は1.93倍とほぼ前年度と同じであった。

後期選抜の志願倍率は1.42倍で、前年度の1.39倍から0.03ポイント上昇した。選抜枠の拡大に伴い、51校93学科の専門学科及び総合学科のうち、後期募集を実施したのは、22校31学科とほぼ3分の1であった。2.00倍を超えた学校・学科は前年度より大幅に減少（18校・19学科→7校・7学科）したが、これは専門学科が減少しただけで、普通科に関しては、前年度と同程度あるいはそれ以上の厳しい状況であったと言える。また、今年度の特徴として、出願後に取り消す受検生が多く出たということが挙げられる。前年度までは志願・希望変更時に志願を取り消す生徒は全体で4～5名でほとんどいかなかったが、今年度は実に40名の受検生が取りやめた。前期選抜の専門学科・総合学科の選抜枠拡大により、普通科上位校・人気校はもとより底辺校の倍率が上昇し、心理面で微妙に影響したと考えられる。

### 各学区の概況（前期選抜、2学区及び9学区が激戦り！）

#### 【1学区-千葉市】

前期選抜は、専門学科の選抜枠拡大により、前年度の1.99倍から1.89倍に下降した。但し、普通科に関しては依然高い倍率で推移し、県内学区の中で一番の激戦りとなっている。学区の上位校のうち、トップ校の県立千葉は大幅に志願者数を増やし（2.82倍→3.27倍）、千葉東は前年度並み（2.89倍→2.94倍）、市立千葉は倍率を下げ（2.58倍→2.15倍）、その代わりに市立稲毛の普通科は倍率を上げた（2.48倍→2.67倍）。幕張総合の普通科は依然人気が高く、ほぼ前年度なみの2.47倍となった。他では千葉西が大幅に志願者を増やし、前年の2.19倍から2.51倍に上昇した。偏差値55～60までのいわゆる中堅校の千葉南、検見川、千葉北、磯辺も安定した志願状況で、2.00倍前後から2.30倍の間で推移している。下位校では若松が2.03倍と人気が高い。専門学科では市立千葉の理数が前年度の超高倍率（3.25倍）の反動で大幅に志願者を減らした。市立稲毛の国際教養は2.97倍

前期予定人員	22,752人
前期志願者数	39,715人
前期志願倍率	1.75倍（1.82倍）
後期予定人員	11,633人
後期志願者数	16,563人
後期志願倍率	1.42倍（1.39倍）

と非常に厳しい入試が続いている。幕張総合の看護科は、志願者数を伸ばし、一昨年のレベルを確保した。

後期選抜は専門学科の募集は一切なく普通科のみの募集となった。前期選抜と傾向はほぼ同じであったが、上位校は2.00倍前後、後見川・磯辺・千葉西などの中堅校は1.80倍強の厳しい入試状況が続いた。女子校の千葉女子は、大幅に志願者を減らし、1.13倍に留まった。

### 【2学区－船橋・市川・松戸他】

船橋・八千代地区の上位校、県立船橋・八千代は志願者数を伸ばし、県立船橋は前年の3.28倍からさらに上昇し3.38倍に、八千代は約70名の志願者増となり、2.68倍まで志願倍率を上げた。逆に葉園台は、前年の高倍率を嫌い志願者を大幅に減らし、2.42倍となった。船橋東は安定した志願状況だが、やや下降気味の傾向が見られる。その他では、船橋芝山が40名の定員減で2.14倍まで上昇した。近年船橋地区の高校には、丁寧な進路指導等を背景に東葛地域からの志願者も目立っている。特に県立船橋には、柏を乗り越え野田市からの志願者も出てきている。市川・松戸地区では、市川の国府台・国分、松戸の小金の人気上昇が顕著である。特に国府台、小金は以前の生徒の自主性を重視する方針から、その伝統を継承しつつ進学指導にも力を入れてきており、進路実績等の向上も見られ、その点が評価されていると思われる。他では、市川東が志願者を100名増やし、前年の2.18倍から2.61倍に急上昇した。近年人気が高い松戸国際は今年度も高倍率を記録し(2.58倍)、また市立松戸は、前年の高倍率から例年並みの倍率に落ち着いていた。同レベルの松戸六実は、前年の落ち込んだ志願状況から回復し一昨年のレベルまで達した。下位校では、市川南、制服変更の松戸馬橋が約100名の志願者増であった。八千代東・八千代西、船橋豊富、行徳・浦安南、松戸向陽は依然緩やかな志願状況が続いている。

後期選抜では、志願倍率の上昇が目立ったのは、八千代(1.64倍→1.89倍)、市川東(1.80倍→2.02倍)、松戸六実(1.07→1.40倍)及び松戸馬橋(1.09倍→1.31倍)、逆に下降したのは、葉園台(2.16倍→1.97倍)、船橋東(2.01倍→1.74倍)、船橋啓明(1.63倍→1.44倍)と、ほぼ前期選抜の傾向を反映した。専門学科では、船橋の理数が志願者を減らしたが(2.56倍→1.94倍)、松戸国際の国際教養は2.38倍と依然高い倍率を示した。

### 【3学区－柏・流山・野田・我孫子・鎌ヶ谷】

東葛飾は、前年度の高倍率の反動で志願者数を減らし、2.78倍と一昨年のレベルに留まる。先に述べたように、従来の東葛ブランドは絶対的なものではなく、近年、県立船橋に志願者が流れるといった傾向が見られ、また、志願者の中にはチャレンジ受験も多く見られ、レベルの復活とまではまだまだ言えない状況である。28年度の併設中学校開校に伴い、どのように変化していくか注目される。3学区2番手の県立柏は、志願者数をやや伸ばすが、このレベルでは低調な志願状況が続いており、レベルの低下が懸念される。逆に鎌ヶ谷、柏南の人気校は、前年なみあるいはやや志願倍率を下げさせたものの、相変わらずの人気で、この2つの高校については、入学後の学習指導や進路指導に注目が集中している。また、地域の発展が著しいつくばエクスプレス沿いの高校については、柏の葉は40名の定員増にもかかわらず志願者数を増やしたが、流山おたかの森は前年の2.29倍から1.87倍に下降し、やや緩やかな入試となった。同じく人気の高い柏中央は、志願倍率が2.55倍まで上昇し、大幅な不合格者を出し、厳しい入試を印象づけた。

後期選抜は、東葛飾が前年の2.60倍から2.09倍へと大幅に下降したが、その他の人気校である鎌ヶ谷、柏南、柏中央はほぼ例年なみの倍率で2.00倍前後の厳しい入試が続いている。この学区は、柏市にある高校に人気が集まる一方、流山・野田・我孫子に

( )は昨年度

学区(地域)	前期選抜	後期選抜
1学区(千葉市)	1.89倍(1.99)	1.54倍(1.55)
2学区(船橋・松戸他)	1.94倍(1.95)	1.51倍(1.48)
3学区(柏・流山他)	1.78倍(1.85)	1.46倍(1.45)
4学区(佐倉・四街道他)	1.67倍(1.72)	1.43倍(1.32)
5学区(佐原・銚子他)	1.35倍(1.50)	1.05倍(1.08)
6学区(成東・東金他)	1.44倍(1.61)	1.26倍(1.26)
7学区(茂原・いすみ他)	1.27倍(1.50)	1.05倍(1.20)
8学区(安房・館山他)	1.22倍(1.43)	0.86倍(0.95)
9学区(木更津・市原他)	1.66倍(1.63)	1.28倍(1.19)

る。特に国府台、小金は以前の生徒の自主性を重視する方針から、その伝統を継承しつつ進学指導にも力を入れてきており、進路実績等の向上も見られ、その点が評価されていると思われる。他では、市川東が志願者を100名増やし、前年の2.18倍から2.61倍に急上昇した。近年人気が高い松戸国際は今年度も高倍率を記録し(2.58倍)、また市立松戸は、前年の高倍率から例年並みの倍率に落ち着いていた。同レベルの松戸六実は、前年の落ち込んだ志願状況から回復し一昨年のレベルまで達した。下位校では、市川南、制服変更の松戸馬橋が約100名の志願者増であった。八千代東・八千代西、船橋豊富、行徳・浦安南、松戸向陽は依然緩やかな志願状況が続いている。

後期選抜では、志願倍率の上昇が目立ったのは、八千代(1.64倍→1.89倍)、市川東(1.80倍→2.02倍)、松戸六実(1.07→1.40倍)及び松戸馬橋(1.09倍→1.31倍)、逆に下降したのは、葉園台(2.16倍→1.97倍)、船橋東(2.01倍→1.74倍)、船橋啓明(1.63倍→1.44倍)と、ほぼ前期選抜の傾向を反映した。専門学科では、船橋の理数が志願者を減らしたが(2.56倍→1.94倍)、松戸国際の国際教養は2.38倍と依然高い倍率を示した。

表:前期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

船橋	普通	3.38倍
千葉	普通	3.27倍
市立稲毛	国際教養	2.97倍
千葉東	普通	2.94倍
船橋	理数	2.83倍
東葛飾	普通	2.79倍
小金	普通	2.72倍
佐倉	普通	2.70倍
八千代	普通	2.68倍
市立稲毛	普通	2.67倍
市川東	普通	2.61倍
国分	普通	2.60倍
松戸国際	普通	2.58倍
柏中央	普通	2.55倍
国府台	普通	2.55倍

所在する高校は苦戦が続く、今年度も前期選抜で1.50倍に届かない学校が多かった。

表:後期選抜で志願倍率が高かった学校・学科

市立稲毛	国際教養	3.30倍
佐倉	普通	2.39倍
松戸国際	国際教養	2.38倍
船橋	普通	2.17倍
東葛飾	普通	2.09倍
千葉	普通	2.03倍
市川東	普通	2.02倍
柏南	普通	1.99倍
国分	普通	1.99倍
千葉東	普通	1.98倍
国府台	普通	1.98倍
栗園台	普通	1.97倍
柏中央	普通	1.97倍
船橋	理数	1.94倍
習志野	商業	1.94倍

#### 【4学区一成田・印旛・佐倉・四街道他】

トップ校の佐倉は、前年より志願者をさらに増やし、2.70倍まで上昇、理数科も3年目になり、志願者数を大幅に伸ばし、前年の1.47倍から2.10倍まで上昇した。成田国際は、27年度からのグローバルスクールの設置を背景に、普通科及び国際科ともに人気が高く、普通科は前年の反動で志願者増、国際はやや志願者を減らしたが、依然厳しい入試が続いている。成田北、佐倉西、佐倉東、四街道の各普通科は、ほぼ例年なみの志願状況で、安定した入試が続いている。2.00倍を超えていた印旛明誠は、人気が一ひと段落し、今年度も1.90倍に留まる。四街道北は、少しずつであるが志願者を増やす傾向にある。専門学科では、成田西陵の各学科が軒並み志願者を減らし、逆に下総の生産技術が大幅に志願者を増やした。佐倉東の調理国際・服飾デザインはほぼ前年なみの志願状況であった。

#### 【5学区一鎌子・香取・旭他】

トップ校の佐原の志願者数はここ3年減少傾向にあり、今年度は前期選抜1.60倍、後期選抜0.98倍で二次募集を行った。理数科も苦戦を強いられ、大幅に志願者数が減少し、前期1.06倍、後期0.25倍でこちらも二次募集を実施した。佐原中学校の在籍減が大きく影響したと考えられる。また伝統校の匠瑠高校は、今年度も志願者数が伸びず、普通科と理数科で前年に続き、二次募集を実施した。一方佐原白楊は、前年よりさらに志願者数を伸ばし、前期選抜2.30倍の学区一の激戦であった。市立銚子は前期選抜1.63倍、後期1.05倍の安定した志願状況が続いている。

#### 【6学区一山武・真金他】

東金・山武地域では、全体として比較的緩やかな状況の中、トップ校の成東の普通科は安定した志願者数を確保し、今年度もやや倍率を下げたが1.95倍を記録した。学区2番手の東金の普通科は、志願者を減らし、ここ3年では最も低い1.57倍に留まった。同じ東金の国際教養は、普通科とは逆に志願者を大幅に増やし、前年の1.38倍から1.60倍まで上昇した。専門学科では、大網高校の全ての学科が前年の志願者数を上回った。後期選抜では、志願倍率が軒並み下降する中、大網の普通科は1.59倍と厳しい入試となった。

#### 【7学区一茂原・いすみ他】

7学区トップの長生普通科は前期2.17倍で前年度よりやや緩やかなレベルであったが、安定して2.20倍前後を確保している。理数科は志願者が伸びず、低調な入試(1.03倍)が続いており、後期では転科合格で定員を確保した。中堅校の茂原は安定した入試(1.70倍→1.71倍)が続いているが、大多数は志願者数が減少傾向にあり、今年度は1.42倍まで下降した。茂原樟陽は、ほぼ前年なみの志願状況だが、工業系の各学科が苦戦を強いられた。統合校の大原(従来の大原・岬・勝浦若潮)は志願者数が伸びず、前期選抜0.69倍、後期選抜でも定員を確保できず、大幅な二次募集(57名)を実施した。

#### 【8学区一鴨川・館山他】

トップ校の安房は、志願者数を前年より約30名減らし、前期選抜1.69倍に留まり、後期選抜でも不合格者1名と非常に緩やかな入試となった。長狭は安定した入試が続き、ほぼ前年度なみの志願状況(前期1.79倍、後期1.16倍)であった。館山総合の各学科は、依然緩やかな入試が続いており、今年度も大幅な二次募集を実施した。

#### 【9学区一木更津・君津・市原他】

前年の志願倍率を上回る学校が多く見られた。木更津東、京葉、市原緑、姉崎が該当するが、特に40名の定員減があった市原緑は、大幅な志願者増もあり前年の1.20倍から2.36倍まで上昇した。トップ校の木更津は、ここ3年安定した入試が続いており、今年度も前期2.20倍とほぼ前年並みであった。前年度高倍率であった袖ヶ浦は、今年度も前期(2.26倍)・後期(1.64倍)とも厳しい入試となった。一昨年大幅に志願者を減らした君津は、前年より減少したが、志願者数329名、倍率1.96倍を確保した。

## 入試制度の方向性は？

千葉県教育委員会は、現在の入試制度（前期及び後期選抜）になって3年が終了した24年度末に「現行の入試制度」についてアンケートを実施した。このアンケートは、この制度になって3年が終了し、その検証のために行われたものである。対象は、公立中学校長、公立高等学校長、県内私立高等学校長、中3生徒及び保護者、高1生徒及び保護者である。その結果を踏まえて、25年度に「千葉県公立高等学校入学者選抜方法改善協議会」を計4回開催し、今後の入試制度について検討を重ねた。その中では、「入試の一本化」という声が強くなり、また「それを実施するためには、最低2年、最善は3年が周知徹底に必要である」という意見が多くだされた。しかしながら、平成26年4月16日に開催された千葉県教育委員会会議において、次のことが承認され、27年度入試及び28年度入試から実施されることとなった。

- ① 専門学科及び総合学科の前期選抜枠を現行の全体募集定員の50%～80%を、50%～100%に変更する。(28年度入試より)
- ② 「志願理由書」について任意の提出（高校側が決定）に改める。(27年度入試より)
- ③ 「入学確約書」について、出身中学校長の公印を削除する。(27年度入試より)

以上の経緯で、今年度（28年度）から、普通科については現行のまま、専門学科及び総合学科については前期選抜で全体募集定員の100%を募集できることとなった。結果、今年度の前期選抜では51校93学科の専門学科及び総合学科のうち、上限の100%を導入したのは39校78学科、およそ84%に上った。右の表は、千葉県の入試制度がどのように変わったかを入試年度で表したものである。この変化の推移を考えると、今年度から始まった入試制度が1年間でまた変更されると考えにくく、やはり最低3年は続くと思われる。実際に25年度において年4回開催された改善協議会は、この変更点が発表された後の26年度及び27年度においては、年2回しか開催されておらずほとんどさらなる進展はない。ただし、思うに今後変更が生じる場合には、入試の一本化しか考えられない。たとえば、複数受検機会を残しながら、普通科の選抜枠の上限を80%からたとえ90%にするといったマイナーチェンジは考えにくい（さらなる後期選抜の二次募集化となり、今以上に指導現場の反発が生じる）。

専門学科及び総合学科の選抜枠が拡大された今年度入試が終わって、どんな現象が起きたのだろうか？問題点はいくつかあると思われるが、ひとつ言えることは、前期選抜を不本意な結果になった受検生は、本来なら後期選抜に臨むわけだが、途中で断念してしまった（つまり後期選抜を受けない）生徒の割合が高くなったということが挙げられる。もちろん、私立高校の魅力の高まり等の影響もあり年々高くはなってきたが、その上げ幅は大きく、やはり今まで以上に受検生への精神的負担が大きくなったからではないかと考えられる。今後さらなる検証がなされ、「入試改善協議会」等で議論されると思われるが、今のところ、いわゆる「入試の一本化」ということは現実味を帯びていない話である。

平成10年度	「推薦による入学者選抜」(校長推薦) 「学力検査等による入学者選抜」
平成11年度	推薦枠 普通科 - 5%～40% 専門学科 - 5%～50%
平成12年度	
平成13年度	
平成14年度	
平成15年度	「特色ある入学者選抜」(自己推薦) 「学力検査等による入学者選抜」
平成16年度	選抜枠 普通科 - 10%～50% 専門学科 - 10%～50%
平成17年度	
平成18年度	
平成19年度	
平成20年度	
平成21年度	
平成22年度	
平成23年度	「前期選抜」(自己推薦)に改める 「後期選抜」に改める
平成24年度	選抜枠 普通科 - 30%～60% 専門学科 - 50%～80%
平成25年度	
平成26年度	
平成27年度	
平成28年度	専門・総合学科の選抜枠拡大(100%)
平成29年度	選抜枠 普通科 - 30%～60% 専門学科 - 50%～100%
平成30年度	
平成31年度	



学校教育支援調査会

松田邦道 氏

「平成 28 年度 神奈川県高校入試結果と今後の入試動向」

## 神奈川県高等学校入試結果の寸評

### 神奈川県 公立高校入試結果について

#### 受験者数・実倍率とも上昇

2016年度の神奈川県公立高校入試では全日制の平均応募倍率が1.22倍、平均実倍率が1.20倍だった。ともに前年度より0.02ポイント上昇している。現行制度4年目をむかえ、入試状況を予想しやすくなったため公立志向が若干上昇している。

#### 現行制度では最も高い平均実倍率

2016年度は5万2,638人が受験し、4万3,609人が合格した。受検後取り消し者310人をのぞいた平均実倍率は1.20倍で、前年度まで2年連続変わらなかった1.18倍を0.02ポイント上回った。初年度の1.17倍と比較すると、現行制度では最も高い平均実倍率になった。

現行制度となった2013年度以降、平均実倍率は1.17倍→1.18倍→1.18倍→1.20倍と推移している。

学科別では普通科は初年度1.15倍→1.18倍→1.20倍→1.22倍と3年連続の上昇を見ることがができる。一方、専門学科は初年度1.20倍→1.13倍→1.09倍→1.09倍と下げ止まった。

最も平均実倍率が高かった学科は普通科専門コースと単位制専門学科の1.26倍だった。

どちらも、芸術科やスポーツ科、理数科、国際科など特化したコースや学科が人気を集めた結果となった。

単位制専門学科では、例年人気が高い市立横浜サイエンスフロンティア（YSF）・理数科は1.67倍→1.46倍→1.61倍→1.46倍と2年前に戻った。隔年現象が続くとすると、次年度は上昇する年に当たると、附属中学も開校するので要注意。横浜国際の国際情報科も臨時定員増と前年度1.30倍から1.71倍に大きく上昇した反動もあって1.38倍にダウンした。同校も次年度は募集数を元に戻す可能性が高いのに加え、隔年現象で実倍率が上昇しそうだ。

#### 普通科実倍率上位10校のうち6校が学力向上進学重点校

普通科の実倍率上位10校のうち、学力向上進学重点校が6校を占めた。前年の7校よりは減っているが、常に高い人気だ。

最も実倍率が高かったのは横浜翠嵐の1.62倍で首位に返り咲いた。応募倍率では4年連



続でトップだが、前年度は200人近く欠席や受検後取り消し者がいたため、実倍率を下げた2位だった。今年度は受検後取り消し者は84人に減ったため、高い実倍率になった。それでも受検後取り消し数は湘南の49人を上回り県内最多。難関国立高校との併願者の多いことの表れである。

2位の希望ヶ丘は前年度までは1.20倍前後で安定していたが、早慶をはじめとした難関大学合格実績を大きく伸ばして人気が上昇した。以下、大和、多摩、光陵、川和が学力向上進学重点校で上位10校にランク入りしている。このうち、希望ヶ丘以外の5校が前年に続いてランク入りした。

常連校の湘南が1.68倍から1.38倍にダウン、東大・京大・東工大や早慶といった難関大学合格実績では横浜翠嵐を上回り人気を集めそうだったが、敬遠傾向が強かったせいか受検者を減らした。ここまで実倍率が下がると次年度の上昇はほぼ確実であろう。

また、前年トップの横浜緑ヶ丘や学力向上進学重点校のなかでも難関のひとつにあたる柏陽が1.43倍で低くはないものの上位10校からは外れた。

普通科以外では上矢部（美術工芸コース）1.69倍、川崎市立橘（スポーツ科）1.64倍、弥栄（美術科音楽専攻）1.64倍、(美術専攻) 1.63倍など、定員の少ない学科やコースの高倍率が目立った。

## 横浜翠嵐、受検者数3年連続トップ

受検者数上位10校では横浜翠嵐が3年連続でトップ。1年おき増減を繰り返す隔年現象が続いていて、今年度は増える年に当たっていた。674人の受検者数は前年の561人はこちら、2年前の646人も上回り、新制度では最も多くなった。一方、前年に差を縮めた湘南は隔年現象も手伝ってか受検者数を605人から543人に大きく減らした。両校は隔年現象の増減が交互に起きているため、次年度はその差が縮まることになりそう。

神奈川県では公立入試の受検後に合格発表のある難関私立高校を第一志望にした生徒が出願を取り消すが、前年度は391人から314人に大きく減少した。今年度は310人が辞退し、わずかながら2年連続で減少が続いている。それだけ県内公立を第一志望とする成績上位生の割合が増えているということだ。

全日制で定員割れをした高校は13校で、二次募集数は245人だった。前年の15校105人、2年前の7校35人を大きく上回った。新制度実施初年度にあたる3年前の23校180人を破り、現行制度で最多だ。制度変更前には高倍率が目立ったクリエイティブスクールの大楠の欠員110人が最も大きな要因だ。公立高校の再編計画で同校は横須賀光明と統合され廃校になることが公表されている。そのため敬遠されたのだろう。今後とも再編計画で順次統廃合される高校が公表されていく予定だから、同様の動きが増えそう。

## 神奈川 私立高校入試結果について

### 推薦・オープン・書類選考が減少、一般が増加

#### 全体状況に大きな変化はなし

推薦・一般・書類選考・オープン入試を合計した県内私立高校の応募者数は、2012年までは37,000件～38,000件だったが、2013年は一気に53,000件を突破。その後も増加し、今年は56,000件を超えた。2013年の大幅増加は、公立入試の前後期1本化で、以前なら公立の前期選抜の合格者は私立の一般入試に応募しないケースが多かった。しかし、前期選抜がなくなっただけで、基本的には公立第一志望の受験生なら誰でも「押さえ」として私立に応募するようになったため、増加だ。しかし、実際にはそれまでの公立前期選抜の合格者数に相当するほどには私立の応募者は増えなかった。公立一本で、前期が不合格でも私立に応募しないまま後期に臨んでいた受験生は、推定で全県に約5,000名いた。こうした受験生はやや減ったが今年も多く、私立には出願せずに公立一本で受験している。

応募の内訳では、推薦・オープン・書類選考がやや減少、一般入試は増加している。今年は県内だけでなく、隣接の東京でも公立中3生が増加したためと思われるが、何れにしても増加の中心は一般入試だ。他県では見られない独特の書類選考は、法政第二と法政女子が以前から実施していたが、2009年から鎌倉学園が実施、まず男子校に広がり、最近は女子校や男女校にも広がってきた。今年は男子校が減少、女子校と共学別学校が増加しているが、男子校の減少は法政第二が共学化したから(鎌倉学園の減少も影響している)で、共学別学校は法政第二を除くと逆にマイナスになる。広がってきた書類選考だが、私立同士の併願受験を前提としない場合は、あまり使いやすい制度とは言えないのだろう。

オープン入試の応募者は女子校が若干増えたものの、合計では昨年より僅かに減っている。オープン入試は2014年に増えたが、中大附属横浜法が共学化し、オープン入試だけで600名近い受験生を集めたからで、他校だけでは減少していた。オープン入試は公立中との入試相談がない入試で、他都県の一般入試に当たると、神奈川では第一志望にせよ、他校併願にせよ、公立中との入試相談を実施するものが主流だ。慶應義塾や日本女子大附属など、一般入試で入試相談を実施していないものもあるが、応募総数では入試相談が大多数だ。直前まで頑張って入試に挑戦するのではなく、書類選考も含め、入試相談が主流、といった神奈川の状況に大きな変化は見られなかった。

#### 上位コースの応募者が増えた学校が多い

先ず男子校からみると。慶應義塾は昨年、応募者が減ったが今年は少し増えた。昨年の減少の理由の一つは、入試日程を1次、2次とも日前倒したことだ。公立入試日程との競合を避けるためで、それまでなら併願できなかった筑波大駒場などの都内国立高校との併願が

可能になったが、逆に2月12日に入試を行う私立高校とは併願できなくなり、同校を断念せざるを得ないケースが見られた。しかし、今年は2月12日のままだが神奈川だけでなく東京も公立中3生が増加していて、同校の1次は2月12日のままだが応募者は少し増えた。

鎌倉学園は、各回合計の応募者が少し減っていて、中心は書類選考の減少だ。他校併願の受験生の動きが少し変わったようだ。藤嶺藤沢はスポーツに力を入れながら大学進学を目指すII類を新設した。在来のコースはI類としていて、今年はI類だけで昨年並み、II類もI類の半分近い応募者数で、合計すれば大きく増えている。

次に女子校では、法政女子の応募者が少し減っている。法政第二が共学化したため、大きく減るのでは、という予想もあったが、帰国入試を新設するなどの対応で「少し減った」レベルにとどめた。さて、同校自身も2018年度から共学化し、「法政大学国際高校」に改称する予定だ。来春の入試ではまた違った展開になりそうだ。日本女子大附属は2012年からは隔年現象的に応募者数が変化するようになっていた。昨年は減少していたので、今年は順番通り増加した。昨年減った推薦入試の応募者が増えて、今年は不合格者が出ている。一般入試では安定した応募者数だった。

相模女子大は一昨年まで応募者の増加が続いていて、昨年は一息ついたが今年再び増加した。昨年新設の書類選考と、推薦や一般入試では特進の増加が目立つ。北鎌倉女子は応募者の増加が続いている。昨年の増加の中心は普通コースの書類選考だったが、今年の特進でオープン入試も増えている。なお、中等教育学校として完全中高一貫だった横浜富士見丘は、編入で高校募集を再開し、推薦と書類選考の一般入試となった。

そして、共学校では法政第二の共学化が大きな話題だ。共学化は男女合計定員にする学校が多いが、同校は男女別定員制で、しかも女子の方が少ない。男子は「枠が狭くなる」と考えたのか、書類選考も学科入試も応募者がやや減ったが、女子は書類選考で男子の9割弱、学科入試でも男子の3分の2の応募者数で、合格最低点は昨年より大幅に上昇、難化したらしい入試だった。中大附属横浜は法政第二の共学化で影響を受ける、という見方もあったが、こちらも応募者が増加した。しかし、一昨年、昨年と実質倍率10倍を超えていたオープン入試はさすがに敬遠傾向が出たようで応募者は減少、それでも男女とも6倍台の実倍率だった。応募者が増えたのは女子の推薦と、入試相談がある一般入試の併願の男女だった。

桐蔭学園は各回合計の応募者が昨年並みだった。昨年、入試相談を行う一般入試(B方式)を書類選考に切り替え、男女・普通理数合計で1,300名を超える応募者があったが、今年は男子部理数科・女子部理数コースの書類選考の応募者がやや減っていて、その分新設した帰国生の書類選考が増えている。桐光学園は昨年までSA・Aの2コース制で、以前は男子部・女子部とも両コースを募集していたが、女子部がAコースの外部募集を停止して、併設中からの内部進学のみとしていた。今年から男子部もAコースの外部募集を停止、男女とも上位コースのみの募集になっている。こうした施策をとると応募者が減る学校が多いが、男女とも増加した。

山手学院は2月13日に加えて10日もオープン型の一般入試を追加、各回合計の応募者数

は少し増えた。増加の中心はオープン型だ。鶴見大附属は一昨年、昨年に続いて応募者が増加している。増加の中心は書類選考だ。横浜翠陵は昨年も各回合計の応募者が少し増えていたが今年は大きく増加した。増加の中心は文理コースで、女子も増えたが男子の増加が大きい。2011年に共学化した学校だが、男子にすっかり定着したようだ。横法創学館も応募者が大きく増えている。昨年、科学技術科といていた工業系の募集を停止、進学クラスを強めた。応募者増加の中心は文理選抜コースと、総合進学コースだ。横法清風も応募者が増えている。総合進学コースも増えているが、少数派の特進コースの増加が大きく、進学校志向の強い受験生が増えたようだ。

アレセイア湘南、鶴沼、三浦学苑、麻布大附属、柏木学園、旭丘も応募者の増加が目立つ。アレセイア湘南は昨年に続く増加だ。昨年は進学コースの一般入試が増加の中心だったが、特進選抜コースの増加も目立つ。鶴沼はいちばん応募者が増えているのが文理コースだ。三浦学苑は工業技術科が減少、進学コースが増えている。工業技術科の減少は、同校の進学クラスの強化の影響だろう。麻布大附属と柏木学園は一昨年以來応募者を増やし続けていて、麻布大附属は体育系の募集停止や特進の新設でイメージが上がっている。積極姿勢が受験生を増やした。柏木学園も各コースとも応募者が増えていて、アドバンストコースの認知度が上がってきた。旭丘は総合学科の大学進学コースと普通科のクリエイティブコースが増加の中心だ。また、関東学院六浦は完全中高一貫校だったが、ラグビー経験者に限った入試を再開した。推薦と書類選考の入試だが、性格上小規模の入試であった。

## 18歳選挙権と何でもグローバル

公職選挙法等の一部を改正する法律が、平成27年6月19日に公布されました。この改正は、選挙権年齢を「18歳以上」に引き下げ、国政選挙に参加することができること等とするとともに、当分の間の特別措置として選挙犯罪等についての少年法等の適用の特例を設けることを目的として行われました。この法律は、公布の日から起算して1年を経過した日から施行し、施行後初めて行われる国政選挙（衆議院議員の総選挙又は参議院議員の通常選挙）の公示日以後にその期日を公示され又は告示され又は適用されます。

既にご承知のようにメディアに取り上げられ、学校現場の様々な催しが報道されました。模擬選挙・デベート・政策討論会そして政治的中立の確保などなど、文科省は大慌てで通知・通達発信し、ここに至っては「私たちが拓く日本の未来 = 有権者として求められる力を身に付けるため」と題する指導用と生徒用の冊子を作って配布しました。国が法律を作り、それを学校に投げてしまふ。何とも付け焼き刃の観を否めないところであります。学校現場に如何ほどの指導者がいるのでしょうか。教育基本法・学校教育法・公職選挙法を熟知している教員はどれだけいるのでしょうか。神奈川県では政治参加教育について、「これからの社会を担う自立した社会人を育成することを目的とし、積極的に社会参加するための能力や態度を育成する実践的な教育をシチズンシップ教育と位置付け」平成23年度から全ての県立高校等で取り組んでいきます。何れにしても、子ども達に細心の配慮をし総合的に

時間を掛けることです。しかし、法律が施行される以上、権利・義務として民主主義を徹底して指導し、公選法についてはルール違反をしないよう指導に当たることと考えます。また、学校現場の混乱と生徒の目線で考えるならば、受験を控えている生徒の為に、選挙権年齢を19歳に引き上げてもらいたいものです。

加えて、為政者と成り得るはずの議員と官僚と官僚にひとこと。我が国を取り巻く国際情勢にまことに疎いこととあります。日中韓の状況、対ロシアへの対応、取り分け米中の経済政策としてアジア諸国の情報など、地方創生・格差問題も大事ではあります。多くの国会議員は勉強不足のためその志を語らないのであります。いや語れないのではないのでしょうか。斯様なことでは、竹島問題・尖閣問題・北方領土問題を子ども達に正確に伝えることなど出来ないうでしよう。与党にあっては大臣の椅子に現を抜かし、野党にあっては政策論議を横目に政局に現を抜かし、官僚にあっては権益確保に現を抜かし、これでは北朝鮮拉致問題などは風化しかねません。

文教施策では、ことばの上でグローバル化を重ねて唱え、我が国を取り巻く本質に目を向けることなく、総花式にスパーの陳列棚であるまいし施策の項目を並べています。そこには社会人育成のための意識と責任と気概が感じられません。

ひとつの例として、文部科学行政施策より ①国立大学の機能強化では「グローバル化やイノベーション創出などに取り組む・・・」 ②日本人留学生の海外留学支援「世界で活躍できるグローバル人材を育てるため・・・」 ③初等中等教育におけるグローバル人材育成「スーパーグローバルハイスクール」「SGIアソシエイト」「高校段階からグローバルリーダー育成の推進」 ④高等教育におけるグローバル人材育成「世界レベルの教育を行うトップ大学や国際化を牽引するグローバル大学（スーパーグローバル大学）を重点支援」 ⑤科学技術イノベーションを担う人材育成「グローバルアントレプレナー育成促進」「グローバルサイエンスキャンプなどを実施」 ⑥ESD 持続可能な開発のための教育「ユネスコスクール間等の交流を促進するとともに、グローバル人材の育成を図る」などなど至るところにグローバルと表現されており、まだまだ枚挙に暇がありません。前述した通り、議員や官僚たちはグローバル化とglobalismの違いをしっかりと認識してほしいと思います。

国政・国策に責任のある方々は、清風匝地の心で科学を用い、政治・経済・教育を動かしてもらいたいものです。私見を述べさせていただきますが、「何を如何に為し成すか」その答えは駒込学園の今とこれからに見ることができるとしよう。学ばせていただきます。

学校教育支援調査会

松田邦道

